

見えてるヒロピンが全てじゃない。見えないヒロピンもあるんだ。

妖怪狩り ～ね●娘ノ変～

人間の文明の利器 vs ね●娘

アプリ『妖怪狩り』で妖怪達をゲットして行うヒロピンCG集です。

『ピロリロリン♪ピロリロリン♪』

何だ、通知か…こんな時間に珍しいな。

ん…………？

『近くに妖怪がいます。アプリを起動して、妖怪をゲットして下さい。』

妖怪がいます…？いやいや、あり得んだろ。

これ随分前にダウンロードしたけど遊び方わからなくて放置してたアプリだ。どんなだっけ。

俺はホーム画面の3枚目にある『妖怪狩り』のアイコンをタップした。

すると突然画面に「Mission」の赤い文字が浮かび上がり、点滅を始める。

その点滅に合わせて、バイブ音がテンポ良く唸り出す。



妖

怪

狩

り

一
ね
己
娘
ノ
変
り

『ブー、ブー、ブー。ブー、ブー、ブー。』

何だよこれ、妖怪なんかいるわけないのにうるせーし。子供騙しもいい所だ。

俺はホーム画面に戻ろうと画面をスワイプしたが、画面は切り替わらなかった。何度やっても、電源ボタンを押しても、赤い文字とバイブ音は鳴りっ放しだ。

マジで勘弁してくれ。

とりあえず俺はディスプレイに出ている矢印の方向へ足を進めた。

そうしないとスマホが馬鹿になる。

付き合ってやるからさっさと静かになれよ。

歩いて行くに連れ、点滅とバイブ音は速くなっていく。

なかなかよく出来ているアプリだな。

ただ、妖怪なんているわけないんだが。

『ブーブーブーブーブーブーブー』

この雰囲気から、ターゲットはかなり近くに居ることが伺える。

もう一度言おう。作りはよく出来ている。

ただ問題なのは、そのターゲットが妖怪だということだ。

いかにも緊張感溢れる演出だが、どうせ安っぽいキャラクターが隠れているくらいが関の山だろう。

その過度な演出とは裏腹に、俺は何の緊張感もなくアプリの示す路地裏へとスツと曲がった。



そこには赤い服を着た女と、猫が一匹いるだけだった。
ほら、やっぱり。妖怪なんかいるわけねーだろっつーの。





赤い服の女「誰、アンタ。」

俺「あ、いや…ちよつと道を間違えちゃって。失礼します。」

ん？



まったく…恥かかせんなよ！

結構キレイなねーちゃんだったから緊張しちやっただじゃねーか！（パンツ見えてたし！）

そして俺はその場から離れ、再び歩き出した。

あれ…？ 矢印が逆方向になっている。

確かさっきまでこっちの方向に矢印が向いていたはずなのに。

しかも点滅やバイブ音も、さっきまでの勢いが無い。

妖怪が遠ざかっている…。

まさか……嘘だろ…？

にわかには信じられないが、考えられることはそれしかなかった。
あの赤い服の女だ。

そんな俺の戸惑いを察知したかののように、ディスプレイには『ヒント』が表示された。

『おい、御主、妖怪の目の前でゲットボタンを押すのじゃ！』

おいおい、どこかで聞いたことのあるような口調だな。

あの甲高い声が耳の中でリフレインするよ。

ん……？ 待てよ、さっきの女………あれってねこ娘じゃ………！！！！？

俺の胸は一気に高鳴った。

そりゃそうだろ、本物のねこ娘を見てしまったんだ。

だって俺は………ねこ娘が大好きなんだ………！！！！

ゲットボタン押したらどうなるんだろう……

俺は「詳しく見る」のアイコンをタップした。

【説明】

妖怪の前でゲットボタンをタップすると、その妖怪に縄が掛かる仕組みになっておる。緊縛のパターンは数パターンあるが、その都度ランダムに割り当てられるのじゃ。捕獲時には持ち運びのしやすい緊縛が選ばれるようになっておるから安心じゃのう。オプションで猿轡も用意しておるから、必要な時には使うがいい。

ちなみに、捕獲後もこのゲットボタンは有効じゃ。

タップする度に縄が掛かったり解けたりするから、思う存分妖怪達を懲らしめるが良い。

マジかよ……タップするだけで緊縛できちゃうんだ。
これは……使えるぜ。

このアプリ作ったヤツ、天才かよ！

俺は早速、ねこ娘がいた路地裏へと引き返した。



ねこ娘「またアンタ……？何か用？」

俺「ああ、ねこ娘さん……ですよね？」

ねこ娘「そうだけど……誰？」

俺「はは、名乗るほどの者じゃ……」

そう言いながら俺は天高く人差し指を上げ、勢いよくスマホのゲットボタンをタップした。

俺「いざいませんよっ……！」





ねこ娘「きゃあ！？ち、ちよつと、何なのよこれ！解きなさいよ！」

俺「いやいや、そんなこと言われて解くんだったら最初っから縛らねーよ。」

ねこ娘「くっ……」

俺「うん、確かに本物だ。その声、いつもテレビで聞いている声だわ。」

ねこ娘「訳わかんないこと言ってるんで、用件を言いなさいよ……」

へー、なるほど。リアルの世界でテレビ放送されてることとかは知らないんだな。なんだかよくわからないけど、とりあえず進めるか。

俺「その声、大好きだけどちよつと静かにしててもらおうぜ。」

そして俺は、オプションの猿轡ボタンをタップした。





ねこ娘「んう、んむうう!!」

俺「おお、スゲーじゃん。でも、ちよつとこれじゃ弱いかな…」

ねこ娘「んんぐ……んふっ……!!」

俺はもう一度猿轡ボタンを押ししてみた。





ねこ娘「んっ……んんうっ……んふっ……!!」

俺「おおお、てつきり布かと思いきや、テープギヤグと来ましたか!」

ねこ娘「んんんっ……んふっ……んむふううっ!!」

俺「呻き声も一級品だな、ねこ娘。今日は楽しませてもらうぜ!」

そしてそのまま、場面は古びた古民家のような所に移った。

ここは確か……昔よく、秘密基地とか言って遊んでいた場所だ。懐かしい匂いだな。

友達と隠れんぼしたり、彼女を連れ込んだり、プチ家でもしたなあ。

そして俺は今、ねこ娘にフェラをさせていた。



ねこ娘「んぐっ……んふっ……ッ……ンッ……！」

俺「妖怪の世界って、フェラとかすんのか？」

ねこ娘「……ンはあ……うっ……こんな野蛮なことしないわよ……臭いし汚いし、最低だわ！」

俺「ふん、妖怪の分際で生意気だな。続ける。」

ねこ娘「くっ……はむっ……ンッ……んふっ……んふ……ングッ……！」

俺「俺のチンポでしっかり練習させてやるから、鬼太郎にもやってやれよ。」

ねこ娘「……ッ……！」





鬼太郎の名前を出すと、ねこ娘は心なしか頬を赤く染め、薄っすらと涙を浮かべた。

俺「へへ、しおらしい所あるじゃねーか。よっほど鬼太郎のことが好きなんだな。」

ねこ娘「…ふはあ！べ、別にそんなんじゃないから！」

俺「そういう所が視聴者に人気なんだよ、ねこ姉さん。」

ねこ娘「アンタにそんな呼ばれ方したくないわ！」

俺「無駄口はいいからしゃぶれよ。」

ねこ娘「……………う……………はむっ……………んふっ……………ジュプツ……………んぐっ……………」

顎が疲れてきたのか、涎が絡み付くようになってきた。

ねこ娘の可愛い口から、下品な音が漏れ出す。

鼻から漏れる切なげなフェラ声も、段々激しくなってきた。

ねこ娘「……………んっ……………んふっ……………ジュポツ……………んっ……………んんっ……………んぐっ……………ジュプツ……………」

テレビの中でいつもツンツンしているねこ娘が、俺のチンポをしゃぶっている。それも服の上からがつつり縛られたまま、頭だけのキツツキフェラだ。夢みたいだな。

でも、ジュポジュポと音を立てながらしゃぶる声も、鼻息が俺のチンポをくすぐるこの感覚も、紛れもない現実だ。

俺は今にもイキそうなくらいになってきた所で、ねこ娘の口からチンポを引き抜いた。

俺「ふうふう、噛み付かれなくて安心したよ。それだけ上手にフェラができりゃあ、きつと鬼太郎にも喜んでもらえるぜ。」

ねこ娘「だから、何で鬼太郎なのよ！鬼太郎はそんなこと望まないし、望んだって私はしないし。」

俺「フン、そーかい。耳まで真っ赤だぜ？ねこ姉さん。」

そう言うと、ねこ娘は俯いて何も言い返さなくなった。

マジ可愛いな、この子……。

俺「上手にしゃぶって気持ちよくしてくれたから、今度は俺が気持ちよくしてやるよ！」

俺はねこ娘のスカートの裾を掴むと、一気に上まで捲り上げた。

そして粘着テープでぐるぐる巻きにし、巾着縛りにしてやった。





秋冬限定で見ることができ、紫色のタイツ姿。

スカートの中はこんな風になってたんだな。

可愛らしいパンティーも、このタイツによって色っぽさを醸し出している。

どちらかと言うとパンストの方が好きだけど、ねこ娘の下半身なら、タイツも悪くない。

ねこ娘「ちよっと、何すんのお変態！」

俺「気持ちよくしてやるって言ったただろ？ どうせ身動きできないんだから、大人しくしてな。」

緊縛の上からスカートを被せ、ビニールテープでぐるぐる巻きに縛ってある。

いくら妖怪ねこ娘でも、脱出なんてできるわけがない。

俺は剥き出しになった紫色の下半身をたっぷり可愛がってやることにした。



まずはお決まりのローターを仕込む。

ねこ娘「んんっ!?!? ちよつと、何入れたのよ! 何これ... 気持ち悪いっ! くう...!」

俺「人間界にはこういう大人のオモチャがあるんだよ。すぐに気持ちよくなるから安心しろ。」

ねこ娘「はあ!?!? 気持ちよくななんかなるわけないでしょ! さっさと外してよ、変態!」

俺「あっはは、反応がまるで人間のウブな女だな。たまんねーぜ。」

ねこ娘「いやっ... んっ... くっ... やめてよ!」

俺は基本、タイツやパンストはローターを固定する為の物だと思っている。

まあ、パンティーでも同じことが言えるが、俺は女が穿いているパンティーをべっとり汚したい。だから、パンティーの上から責める方が好きなんだよな。

そうなつてくると、パンストやタイツは打って付けのアイテムと言えるわけだ。

オシヤレで穿いているタイツが、不覚にも自分のパンティーを汚す為のアイテムになる。最高じゃないか。



でも、ローターだけでは流石に限界がある。

よっほどの淫乱女ならまだしも、相手はねこ娘だ。

いくらローター初体験と言えど、パンティーを一枚隔てている。

その分クリへの刺激も、若干やわらぐ。

タイツでしつかり固定はされているものの、所詮は伸縮性のあるタイツ。

だからここで、次のオモチャが登場するってわけだ。

俺「ローターだけじゃ物足りないみたいだな。だったらコイツでどうだ！」

そう、電マ様だ！



ねこ娘「んああああッ！！！！」

俺「どうだ、やっぱりこれくらいの刺激じゃないと興奮しないか？」

ねこ娘「んんん、くっ……こ、興奮なんてしてない……ッ！」

俺「そうか、もつと強くか。ほら、グイグイ押し付けてやるよ！」

ねこ娘「ああああッ！！！！うぐっ、くふううッ……やめて……ンンン……ッ！！！！」

ローターの上から電マ責めされたら、普通の女だってそう我慢できるモンじゃない。

ましてや大人のオモチャ初体験のねこ娘。

電マを押し付けた途端に反応は激変した。

ローターでもだいたい感度が上がってたみたいだな。

必死に股を閉じて逃れようとするが、上半身の動きを封じられている以上、無意味だ。

どれだけ藻掻こうが、俺の電マはどこまでも追いかけるぜ。

ねこ娘「お願い、もうやめて……ッ！なんかおかしくなりそう！！やだ、やめてッ……」

いやああああッ……！！！！」

そして、意外にもあっさりとその時は訪れた。



ねこ娘「んはああああツツツ……!!!!!!」





俺「どうしたんだよねこ娘。興奮なんてしないんじゃないの？」

ねこ娘「ハア……ハア……こ、この……ひとでなしっ！」

俺「惨めにイカされても尚、強がる所がねこ娘らしくていいねえ……そんなにパンティー汚してさ。」

ねこ娘「……ッ……！」

タイトの上からでもわかるくらいに、ねこ娘のパンティーには染みが広がっていた。こんな可愛いパンティーには不釣り合いな程に、淫らな汁が。

ねこ娘「もう気が済んだでしょ……ハア……ハア……いい加減拘束を解いてよ。」

俺はふと、おもしろいことを思い付いた。

確か、緊縛を解くのもゲットボタンだったよな。

ってことは、この状態のまま緊縛を解いたら、スカート中着の中で腕は自由になるわけだ。

俺「わかったよ、じゃあ縄だけ解いてやる。」

そうやって俺はスマホのディスプレイに表示されているゲットボタンをタップした。すると、モゾモゾとスカートの中が動き出した。緊縛は本当に解除されているようだ。マジでこのアプリスゲーよ。

ねこ娘「ワンピも何とかしてよ。中だけ解放されたって意味ないじゃない。」

俺はニヤリと笑って答えた。

俺「それは自分で何とかしろよ。妖怪だろ？」

ねこ娘「……アンタまさか……」

俺「そうだよ、自慢の爪で何とかしろって言ってんだよ。」

ねこ娘「どうして私が自分の爪でお気に入りワンピを引き裂かなきゃいけないのよ！」

俺「それが嫌なら一生そのままだな。好きにしろ、お前の勝手だから。」

我ながら名案だと思ったさ。

大切なワンピースを、自分の爪で引き裂くしか脱出方法はないんだからな。

更にその後の展開を考えると、引き裂いたボロボロのワンピース姿を俺に晒すことになる。女にとっては屈辱的且つ恥辱的で、勇気のいる決断だ。

でも俺はわかっていた。

ねこ娘は、絶対にワンピースを自らの爪で引き裂いて、脱出するってな。

それがヒロインってモンだろ？

ねこ娘「わかったわよ…その代わり、タダじゃ済まないわよ。アンタにきっちり弁償してもらおうから！」

ほらね、言った通りだろ。

さっさと出てこいよ、こっちには神アプリが付いてるんだからよお！

ねこ娘「ニヤアアアアア！！！ニヤニヤアアアニヤアア！！！」

まるで獣のような鳴き声が響いたかと思うと、一瞬にしてスカート巾着が切り裂かれた。





俺「へ、へへっ……まあ危ないからその爪さっさとしまえよ。」

ねこ娘「アンタのことも切り刻んであげようか?」

俺「フン、妖怪ごときが人間様の文明の利器に適うわけがねーんだから。」

俺はスマホを掲げながら、ねこ娘の迫力に応戦する。

ねこ娘「何が文明の利器よ…アンタ達人間の欲望の塊じゃない!」

俺「あっははは、ローターと電マでイカされておきながらよく言うよ。」

ねこ娘「…………ツ…」

俺「そもそも、お前は人間には手を出さないんだろ?そんなことしたら鬼太郎に嫌われるぜ?」

ねこ娘「くっ…! 大きなお世話よ。」

そう、鬼太郎の一味は人間には手を出さない。

口では凄んで見せても、それは所詮、虚勢に過ぎないことはわかっていた。

『ピロリロリン♪ピロリロリン♪』

お、通知だな。今度は何だ？

『新しい妖怪が現れました。アプリを起動して、妖怪をゲットして下さい。』

へへ、ねこ娘だけじゃないんだ。どれどれ？

【新しい妖怪】

一反木綿、ぬりかべ、犬山まな、鬼太郎

うわっ、そうそうたるメンバーじゃないの。

あれ？ってゆーかまなって妖怪なのか？

あれって確か人間だったような……まあこの際どっちだっていいけど。とりあえずじゃあ、一反木綿から捕まえるか。

俺「悪いけど新しい妖怪が現れたらしいから、ちよつと行ってくるわ。」

ねこ娘「話はまだ終わってないわよ。逃げる気？」

俺「バカ言えよ。逃げられて困るのはこっちなんだよ！」

俺はもはや慣れた手つきで、スマホのゲットボタンを華麗にタップしてみせた。
すると再び麻縄が現れ、あっと言う間にねこ娘を縛り上げた。



ねこ娘「あがつ……ンガッ……ンハア……！」

今度の緊縛は、海外でよく用いられる『ホグタイ』という縛り方だった。

ホグタイ(又はホツグタイ)は、元々は家畜や獣等を縛る方法として存在していたらしい。四つ足をまとめて縛り上げ、全く身動きができないようにする方法だ。

今回ねこ娘に施されたホグタイは、割とオーソドックスな形だった。

まずは両手・両足を縛り、縛った手首の縄に新しい縄を通す。

その縄を足首の縄にも通し、ギュツと引っ張れば手足が連結されるという縛り方だ。

こうすることで、どちらかの縄を解かない限りは身動きすらもままならない状態となる。

そして今回の縛りのポイントは、その手足を繋いだロープが更に髪の毛にも括り付けられている点だ。

ちようどお団子状にまとめられた髪の毛に、縄が巻き付いていた。

またまたオシヤレが仇となった形だな。

髪の毛を自身の足で引っ張る形となり、これがキレイな逆海老反り型を演出していた。

ねこ娘「ンンッ……んふっ……んんううッ……！」

極め付けは目隠しとボールギャグ。

絶対に逃げられないように、AIが独自に判断しているのだろうか。

なかなか優秀な頭脳をしている。



俺「ほらな、手も足も出ないだろ？俺はスマホをタップしただけだぜ。」

ねこ娘「んぐう！んっ……ふぐううっ！！！」

俺「あっはは、ついでに声も出ねーか？いいザマだな。」

タップ一つで妖怪を狩るアプリか……マジで無敵だ！

俺「まあ安心しろよ。今からお前の仲間をここに連れて来てやるんだからさ。」

ねこ娘「んんっ！んんんっ！！！」

俺「何言ってるのかはわかんねーけど、喜んでるのだけはわかるよ。じゃ、待ってな。」

俺はねこ娘のくぐもった声をBGMに、その古びた家を出て行った。

ねこ娘と同じ要領でいいんだよな？

この地図を辿って行けば、今度は一反木綿に会えるはずだ。

あの時と同様、点滅とバイブの間隔が狭くなって来た。もうすぐだ。

辿り着いたのは、ドラム缶が3つ置いてあるような小さな空き地だった。

そのドラム缶の向こうに、薄っぺらい白い物体が見える。
あそこだな。

俺はねこ娘の時とは違った緊張感を感じながら、ゲットボタンをタップした。

一反木綿「な、な〜にするとね〜！」

一瞬で捕獲に成功した。

するとその瞬間、通知が届いた。

『新しい妖怪をゲットしました。ワンポイントアドバイスを開きますか？』

ワンポイントアドバイス…？何だろ、見てみよう。

【ワンポイントアドバイス】

新しい妖怪をゲットしたようじゃな。おめでとう！

これからもどんどん妖怪をゲットしていくことになると思うが、一つだけ決まり事がある。

それは、『一番先に捕まえられた妖怪は、その中で最下層となる』というモノのじゃ。

妖怪にはそれぞれレベルがあつて、強い弱いも当然ある。

じゃが、この『妖怪狩り』で一番先に捕まってしまった妖怪は、その後に捕まったどんな弱い妖怪よりも、立場は下ということじゃ。

つまり、後から捕まえた妖怪達を利用して、最初に捕まえた妖怪を懲らしめることも可能。どうじゃ？きつとお主の一番好きな妖怪が最下層となっておるじゃろう？

それが偶然か必然かは、閻魔大王のみぞ知る…と言ったところじゃな。

これって要するに…一反木綿を使ってねこ娘をいじめることができるってことだよな？
ねこ娘が最下層って、最高過ぎるじゃんか！！

俺「おい、一反木綿。俺を秘密基地まで乗せてってくれ。」

一反木綿「はいなく、ガッテン承知〜〜！」

俺は鬼太郎にでもなった気分で一反木綿に跨がり、来た道を引き返してさっきの秘密基地へ向かった。



ざっと一時間くらいだろうか。

戻ってみるとねこ娘は全く身動きができていない状態で、まるで忠犬のように待ち構えていた。

ねこ娘「ンッ……ふがっ……ンハア……」

ただ一つ変わった点と云えば、涎をだらしなく垂れ流し、畳に染みを作ったくらいか。息も随分荒いようだ。

俺「そんなに畳汚して、ただで済むと思うなよ、ねこ娘。」

ねこ娘「……っ……ふぐう、んんうンッ……」

いつもテレビでは勇敢に妖怪に立ち向かい、人間達が危ない時には身を呈して助けてくれる。そんなねこ娘が、俺の目の前で、しかも俺の手によって、こんな姿を見せている。

もっという姿見せてくれよ、ねこ娘。



俺はねこ娘の方へスマホを向けると、ゲットボタンを押した。

すると一瞬にして、ねこ娘の動きを封じていた全ての物がリセットされるように消え失せた。

ねこ娘「タダで済まないのはアンタの方って言うてるでしょ…このワンプいの代償はデカイわよ！」

俺「おい、一反木綿。コイツを懲らしめてやってくれ。」

一反木綿「ガッテン承知〜。」

ねこ娘「え、一反木綿???なんでアンタがここにいるのよ!?!」

一反木綿「ねこ娘さん、悪く思わんでほしいばい、閻魔大王様の決め事だから仕方ないっしょ〜。」

ねこ娘「ちよつと、何すんのよ!放しなさい……………くっ…放してッ!」



ねこ娘「うぐうう……ッ……なんて力なのよ……アンタいつの間にかこんなに強くなったの!？」

一反木綿「ねこ娘さんは最下層に決まったとね。だから誰にも勝てないとよ。」

ねこ娘「さ、最下層って何よ……なんで私がッ！」

そうか、ねこ娘は最下層だから、このゲームの趣旨すら理解できていないのか。

これは屈辱感満載、強気なツンツン女子のまま、格下の仲間に好き放題やられるわけだな!

ねこ娘「アンタ仲間でしょう? どう見たってピンチなのは私じゃない……どうしてこんなこと……ッ！」

一反木綿「だから、閻魔大王様の決め事だから誰も逆らえないっしょ、逆らったら地獄行きばい。」

ねこ娘「く……苦しい……ッ……ぐ……あぐう……!」

俺「そのまま力を緩めず、ねこ娘を一気に絞め堕とせ。」

一反木綿「あいなく、ガッテン承知。」

ねこ娘「あがッ……かはっ……ッ……い、息が………でき……な……い……ッ……」

随分体力を消耗していたねこ娘は、数分も経たないうちに一反木綿に絞め堕とされた。





俺「しばらく寝かशीといてやれ。俺はその間に他の妖怪たちをゲットして来るからさ。」

一反木綿「ガッテン承知〜。しっかり見張つとくばい！」

俺はこの場を一反木綿に任せ、次の妖怪を探しに外へ出た。

何度も出掛けるの面倒くさいし、一気に妖怪掻き集めるか。ぬりかべ、まな、鬼太郎の順に狩って行こう！

幸いにして3人とも近くにいてくれたから、ゲットするのも思っていたより時間が掛からなかった。まるで投げ輪のようにポンポンと縄を掛け、最後にぬりかべとまどめて一つに縛り上げた。

俺「さあみんな、我が家へ帰るぜ。お姫様がお待ちだからよ。」

俺はぬりかべの上に飛び乗り、ぬりかべに歩かせた。

いつもより高い位置の風が、俺の体を優しく撫でる。

なんて心地よくて清々しい気分なんだ。

俺はそんな最高の場所で、秘密基地に着くまでの間、どうやってねこ娘を責めようかと計画を練る。

まずはぬりかべとなまを使っけていじめるか。

鬼太郎は…そうだな、最後の切り札ってヤツだ。

とりあえずこうしてああして…あれをああでこれをこうだな、よし。

基地に着くと、ねこ娘はまだ眠っていた。

その隣で一反木綿も眠っていた。

見張りが寝ててどうすんだよ、全く。

とりあえず一反木綿のことは無視し、俺はねこ娘の体を抱え起こす。

そして計画通りにぬりかべに指示を出した。

ぬりかべ「ぬりかべ、わかった。」

あとはねこ娘が目覚めるのを待つだけだな。

ふっふっふっ……。

ねこ娘「ん……んん……っ………んっ……」

俺「そろそろねこ姉さんがお目覚めだぜ。」



ねこ娘「な、何これ……えっ、ぬりかべ!?!」

ぬりかべ「ねこ娘、起きた。」

ねこ娘「ちよつと、アンタまで何やってんのよ、ぬりかべ!」

ぬりかべ「ぬりかべ、閻魔様の決め事、守る。」

ねこ娘「くっ……みんなして閻魔様、閻魔様って……私と閻魔大王どっちが大事なのよ!」

ぬりかべ「閻魔様に逆らったら、地獄、落ちる。」

ねこ娘「へ、そう。だったら私がアンタを地獄に落とすとしてあげようか!」

俺「まあまあ、そんな可愛いブラして凄むなって。」

ねこ娘「えっ……ちよ、ちよつと!?! なんて脱がされてんのよ! ぬりかべ、手を放してっ!」

ぬりかべ「ぬりかべ、離さない。」

俺「恥ずかしがるのはまだ早いぜ……ねこ姉さん。」



まな「ねこ姉さん。」

ねこ娘「ま、まな……どうしてまなまでここに……ッ……」

まな「だって、ねこ姉さんの可愛い下着姿が見たかったんだもん。」

ねこ娘「な、何言ってるのよ……まな、しつかりして！」

まな「ねこ姉さん、いつもそんな可愛いブラしてるの？ギャップがズルいよ。」

ねこ娘「う、うるさいっ！余計なこと言わないの！」

まな「どうして？可愛いから可愛いって言うだけじゃん。どうして怒られなきゃいけないの？」

ねこ娘「目を覚ましなさいって言うてるの！」

まな「え？私はずっと起きてるよ。さっきまで寝てたのはねこ姉さんでしょ？」

ねこ娘「一体どうしちゃったのよ……なんでまなまでこんなことに……」

一番可愛がつてる妹のような存在のまなには、流石のねこ娘もシヨツクを隠せないようだな。

俺「まな、そろそろねこ姉さんをいじめてやれ。」

まな「は〜い、了解で〜す。」

ねこ娘「ちよ、ちよつとまな……どうしてそんな物持ってるのよ……嘘でしょ、やめて……いいいやあ!!」



ねこ娘「うぐううう……ッ！……！」

俺「どうだ？俺にやられてた時と、まなにやられてるの、どっちが気持ちいい？」

ねこ娘「どっちも気持ちよくなんかないわよ！まな、やめてッ！……！」

まな「え、気持ちよくないの？私じゃ力が足りない？じゃあもつと押し付けてあげるね。」

ねこ娘「んんんううううッ！……！」

俺「あっはははは、俺の時より喘ぎ声がデカいんじゃないか？」

ねこ娘「んんん……くっ……お願い、まな……私この刺激苦手なの……おかしくなっちゃうの……ッ……だからもうやめて……お願いだから……まなッ！……！」

まな「うっふふふ、ねこ姉さん可愛い。おかしくなっちゃうの？そんなに電マが気に入ったんだ？」

両腕はぬりかべにがっしりと捕まれ、両膝を縄で縛って強制的に開かせてある。さつきみたいに脚を閉じてモジることもしかない。

背中にはぬりかべという名の壁がピッタリとくっ付き、逃げ場はない。

ねこ娘「ああああッ……もうダメ……まな、止めてッ！まなあああッ！……！」

まな「もつと感じて？ねこ姉さん♡」





ねこ娘「んふうふうふう……ッ……んぐふうふうふうッッッ……!!!」

カラン、コロン、カラン、コロン……

ねこ娘「えっ……き、鬼太郎………?」

鬼太郎「何やってるんだ?ねこ娘。」

ねこ娘「鬼太郎!お願い、助けて……みんなおかしいの。みんなで私のことを……ッ……」

鬼太郎「おかしいのはお前だろ、ねこ娘。」

ねこ娘「……っ……鬼太郎まで何言ってるのよ……いい加減にしてよ!どうなっちゃったの!?!」

鬼太郎「人間の作った機械は、そんなに気持ちいいのか?」

ねこ娘「………えっ……」

鬼太郎「そんなに股を濡らして、それでも自分がおかしくないうって言い切れるのか?」

ねこ娘「そ、そんな……アンタだって見てたんでしょ………だったらどうして助けてくれないのよ!?!」

鬼太郎「もう僕を頼らないでくれないか。ずっと大事にしたいって思ってきたけれど、もうやめだ。」

ねこ娘「どうしてよ………グスン……ッ………いつもは助けてくれるのに、どうしてなのよお!?!」

鬼太郎「お前がそんな淫乱な女だとは思わなかったからさ。もうこのまま、人間の世界に行けばいい。」

ねこ娘「ちよつと待ってよ……グスン……人間の世界ってどういうこと？」

鬼太郎「気に入ったんだろ？人間が作ったオモチヤも、人間が作ったアプリも！」

ねこ娘「知らないわよ……気に入ってなんかいないし、アプリって何のことよ？」

鬼太郎「もうお前なんか妖怪じゃない。その人間と仲良くすればいいさ。その代わりに、まなを妖怪として迎え入れることにした。」

ねこ娘「本気で言ってるの……？人間と妖怪は近付き過ぎちゃいけないっていつも言ってたくせに……私の代わりにまなを入れるってどういうことよ！そんなの私が許さないッ！」

すると鬼太郎は、ねこ娘のこめかみに指を突き付けた。

鬼太郎「俺に殺されなくなかったら、大人しく人間を受け入れるんだ。」

ねこ娘「……………ッ……！」

なるほど、あれは鬼太郎の必殺技『指鉄砲』か……あれを突き付けられちゃ、ねこ娘も降参だな。

俺「そういうことだ。さあ、鬼太郎もそう言ってることだし、さっさと事を済ませようぜ。」

俺はぬりかべに解放の指示を出し、両膝の縄も解いてやった。

俺「そんな体勢じゃヤリにくいからな。きつとAIなら、もつと適した緊縛を出してくれるだろうよ。」
そう言つて俺は、トドメを刺す勢いでゲットボタンをタップした。

ねこ娘「ンツ……んんう！んふっ！！」

流石は神アプリ。三度目の緊縛も最高のチョイスだ。
口には隙間なくビニールテープが貼り付けられている。
これまでの流れで、俺の好みを学んだんだな。

そして鬼太郎はまたこめかみに指を突き付けた。

鬼太郎「さあ、ねこ娘。上に跨がるんだ。」

ねこ娘「…………ツ…………ンツ…………グスン…………ツ…………」

ねこ娘は泣きながら、俺の上に跨った。



最後の緊縛にAIが選んだのは、諸手上げ縛りだった。

両手首を合わせて縛り、そのまま上へと持ち上げて後頭部まで回す。

ここはお好みだけど、体の好きな所に縄を掛け、その縄と手首を縛っている縄を連結させる。そうすることによって、ワキが開きっぱなしの状態になるわけだ。

女にとって、ワキを晒すのは恥ずかしいこと。

ましてや愛しの鬼太郎や、可愛いまなが見ている前では、その羞恥心もひとしおだろう。遂には目玉おやじまで登場してきた。

鬼太郎「どうですか、父さん。ねこ娘のワキは。」

目玉おやじ「うむ、まあまあじゃな。なかなかキレイにしておるようじゃ。」

鬼太郎「まなの方はどうだ？」

まな「うん、こっちもとってもキレイ。でも…ちよつと酸っぱい匂いがしてるかな。」

ねこ娘「ンツ…………んふつ…………ンンツ!!!」

ねこ娘は恥ずかしそうに身をよじる。

そりゃそうさ、まなの鼻なんてねこ娘のワキに着きそうなくらい近いんだから。

涙を流し、顔を真っ赤にしながら、俺のチンポをそのマンコに啜え込んでいる。

小ぶりなおっぱいはいいの割に、乳輪は少しデカめだ。
色はまあ、キレイな方だな。

肝心のマンコの締め付け具合だが……完璧だ！
妖怪のマンコって、こんなにキツくて気持ちいいんだ。

俺もワキは好きだから、この縛りも最高だ。
そして何より、ギャララー達がいい演出をしてくれている。
目玉おやじがワキを凝視し、まなは至近距離で匂いを嗅ぐ。
鬼太郎は指鉄砲を突き付ける……。

ああ、なんて最高の景色なんだ。こんな気持ちいいセックス、したことないぜ！

鬼太郎「いいですよ、中に出してくれても。もうねこ娘は人間界に送りますので。」

ねこ娘「ンンンンッ！んんんううッ！んふうッ！……！」

何やら激しく叫んでいるが、残念ながら俺には何を言っているのかわからない。

俺「ああ、じゃあ遠慮なくそうさせてもらおうよ。」

まな「やったね、ねこ姉さん。私、妖怪の世界でも頑張るからね！」

ねこ娘「ンンンンンッ！んふうううッ！……！」

ムロケリ、ムロケリ…！…！ムロケリ…！…！



ん…………？夕方？？
何だ、夢か…………。

そりゃそうだよな、夢に決まってるよな。
妖怪狩りなんてアプリ、取った覚えもないし。

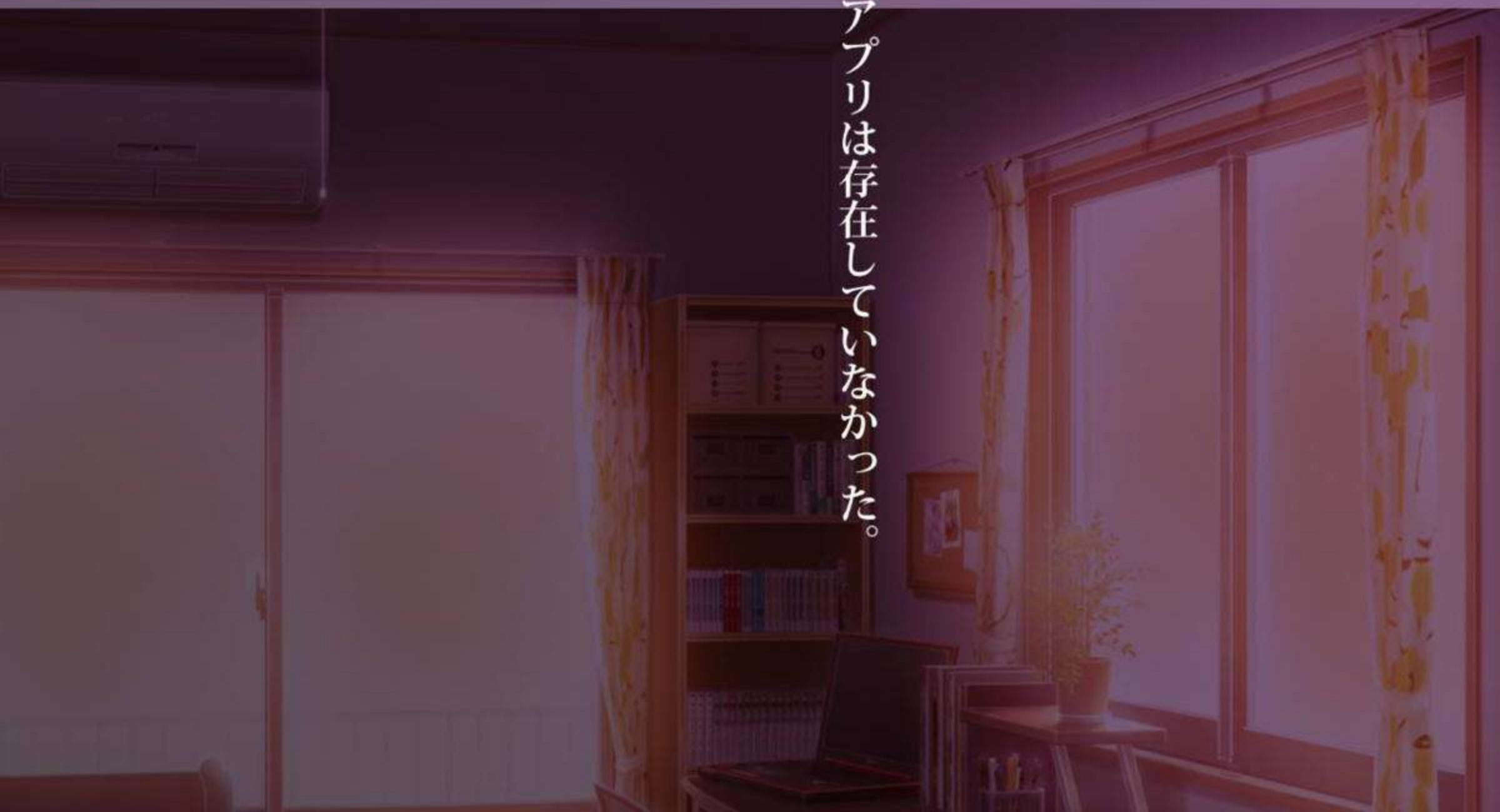


念の為、スマホを確認してみたけど、やっぱり妖怪狩りなんてアプリは存在していなかった。

はあ……それにしても、ねこ娘可愛かったなあ。

ん？やべ、夢精してんじゃん。

アニメキャラで夢精とか、俺もいよいよ末期だな……WWW







鬼太郎「気は済みましたか？」

えっ……き、鬼太郎？

なんだ、まだ夢の中なのか……？





鬼太郎「僕の仲間にあんな酷いことをして……気が済んだかって聞いてるんだあああ……!!!!」





ま、眩しい…なんだこれっ!?

鬼太郎「指鉄砲おおお!!!!!!」

えっ……………

夢なのか…夢じゃないのか……………？

そもそも、夢って何だ……………？

妖怪狩り〜ねこ娘ノ変〜 終

企画・制作 二次元スタジオ BLACK★BASE

























































































